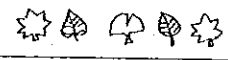


昭和60年5月

(1)



恵心



開所五周年を記念して

会長 松尾 富久子



春寒去り難く、肌寒さを感じる日もある此頃ですが、いつしか柳のみどりも、そよ風に靡く春がやって参りました。

四月に入ると、私達は、当ホーム設立満五周年を迎えます。其の記念行事の有り方には種々やり方もあるようですが、今年六月には、中四国職員研修大会の当番が当たっている関係上、来賓をお招きして、記念式をする等は、後日にゆづるとして、先づ、創設以来、今

創立 5 周年
記 念 号
昭和60年5月1日

生きがい
のある
楽しいホーム
作りを目ざして

発行所
身体障害者療護施設
三恵ホーム
愛媛県温泉郡
川内町則之内字恵雲

日まで、入所者初め、職員一同、大過なく過して来れた事に対して、当ホームの守護神である蛭子の命をお祭りする恵比寿神社に、感謝のお祭りを奉仕する事となり、浜松の貴霊宮から、山陰神道七十九代管長及、高山禰宜に御出向頂いて、三月二十九日午後二時より、厳肅に、感謝祭を斉行して頂いた次第です。記念講演をして頂くつもりでしたが、飛行場までの時間の誤算で、お時間がなくなり、原稿を残してお帰へりになりましたので、茲に、寄稿させて頂きまますので、熟読して下さい。皆様今後の生き方の指針として下されば、幸甚と存じます。

今自分を不幸だと思う人に、
幸福は辛抱強く待つ事である。

山陰 管 長談

ある福祉の大家は言った
「既に失われたものを教えるなかれ。今、あるものを最大限に生かせ」。また、古人は言った。
「死んだ子供の年を教えるな。死んだ子は、みな良い子であった」と言うな。つまり、過去に心を向けて、現在の幸せに感謝できな

い、心の在り方、はよくないと忠告しているのである。

私は不幸である、と云う条件は、大体次のようなものであろう。

(A) 身体障害者 (B) 不治の病を持つ者 (C) 離婚した者 (D) 配偶者に浮気されている者 (E) 経済破綻した者 (F) 神経症を患っている者 (G) 登校拒否をしている者 (H) 結婚できない者 (I) 進學できない者 (J) 敗北者

以上何れも、救いようの無いものばかりである。しかしこれらは、結果に対しての絶望であつて、未来を見直せば救いがある。その自覚が重要である。

曾つて私も、不幸は、自分だけをねらうものだと錯覚していた。だから絶望的だった。不治の病(肺結核第三期)と貧乏。仮に再起出来たとしても、戦後の混乱期であり、何一つ希望は無かった。百姓もできず、会社勤めもできない体で、それでもひたすらに健康回復の訓練に精進していた或日、一つの悟りが訪れた。「死を恐れてはならない。時間は沢山あつても、たった今、此の瞬間を生きているだけなのだ。明日は来てみなければわからない。今、此の瞬間を必死に生きるべきだ」

人の運命は、すべて、予定であつて、決定ではなかった。それから、私の前を通り交う人物から、得るものを、悉く、栄養とし、糧とした。勿論、其人々に奉仕したからこそ、その人格から得るものがあったのだが、その稔りは皆、私の人格となり、才能になっている。だから私は今まで、人材に恵れてきた。と信じている。総ては、小さな事の積み重ねであつた。私は度胸も無く臆病だが、ただ偏に、積極的に、着実に、人の幸せを考え、無理をせず、辛抱強く積み重ねて来たからだと信じている。

我が家の家訓に、「待つ間の辛抱」と云うのがある。待つことの、間合、を辛抱するのである。例えば、葛湯を造るのに、始はいくら掻き廻しても、透明にはならないが、或時が来ると、一瞬にして透明に

なり、粘りのある葛湯が出来るようになるのである。

不幸な人よ。幸福は、待つしかないのである。また不幸は、「観方と考え方」で変化するものである。死ぬほどの苦しみも、やがては、禍が転じて福となることに気づくものである。自らの幸福だけを追い求める者には、利己主義者が多い。そんな人物を世の中の人々がどうして許してくれようか。人それぞれにスケールが違うが、大は小なりに、身勝手は、身の破滅となるだけである。

「人は人と交つてこそ、其人から得るものがある」と、従つて、偉大な人物に接して、其人に奉仕する者になれば、やがて、その人の気が移り、やがて、今度は、自分が奉仕を受ける身になることになる。人は他人に奉仕することで成長し、そのやり方を学び、だんだん、大きなスケールの心配りが出来る人となる。これを「修行」と云うのだそうである。

今の世は福祉時代と云われているけれど、その福祉の対応は、それを受ける一人の個人を、内面的に幸福に導く要因とはなっていないのではなからうか？人が人として生きるには、其人の内なる心を聞いて、自らの心で人生を明るく方向へ向けねばならない。それでこそ、艱難汝を玉にすると云えるのである。と結ばれた。

誠、これからの福祉は、他力本願では行詰まる日が来るような気配を感じる昨今の財政でもあるから、五周年記念事業の有り方も時代に則した考へを出して行き度いと思ふ次第ですが、何が一番大切な記念事業であるかを、みんな、神様に祈念して、最高の神の御智慧を、授かり度いものと願う次第です。

最後に、入所の皆さんも、職員も皆共に、山陰管長の御講話のように、人生は最後まで自分達を磨く修行の道場と心得て、今日を無事過せる事に先づ感謝し、以つて今日より明日と、一日一日をより向上しに行きたいものと願ひつゝ、欄筆します。

五周年に想う

施設長 徳永邦人



吾が三恵ホームは、ご承知の如く重度の身体障害者で、常時介護を必要としながら、かつ、自宅において十分な介護を受けることが困難な人を、長期にわたって収容して治療と養護を行なう施設であります。昭和五十五年四月一日、この地に開設されて満五年になりましたが、思えば、当時私は特別養護老人ホーム角野荘（新居浜市）に勤務していましたが、松尾会長さんと共に適地を求めて東奔西走し、漸くこの地を得ました。国道11号線から僅か百メートル足らずであり、井内川沿いの溪谷美豊かな誠に恵まれた環境に在り、立地条件は申し分ないと思っております。設計、施工から開園準備、職員の採用、機器類の整備等々、随分と苦勞もありましたが、今は懐かしい思い出もあります。満五周年の記念すべきこの年に園長として赴任しましたのも何かの縁かと存じ感慨無量なるものがあります。

今、療護施設では、障害者の重度化、高令化更には重複化という色々な問題が、出てきています。入所者一人一人の能力が違い、発達のパターンも違います。従って集団生活での制約はあるにせよ、個別化の

問題が起つてきます。一括処遇や平均的処遇ではなく、一人一人の発達とニードに従って処遇するというむずかしい問題をかゝっているわけです。又、これからの障害者福祉が、どのような方向に進んで行くのか、さだかでない情勢にあり、入所者の費用負担の増大、措置費の見直し等と共に、場合によっては福祉の分野にも企業進出があるかもしれない時代になりつつあります。今迄のような与えるサービスから脱皮し、新しいサービスへと変らざるを得ないのでありますから、障害者がライフサイクルの各段階で、夫々のニードに応じ施設利用が出来るような施設の一層の充実整備をはかり、又、障害者の社会参加をはばんでいる、一般社会の障害者に対する偏見等「心の壁」をとり除くことにも積極的にとり組んで行きたいと思っております。

ともあれ「生きがいのある楽しいホーム作り」を目指して、職員と共に一丸となって努力致したいと思っております。今後とも関係各位のご指導をお願い致しましてご挨拶と致します。

出 合 い

事務長 山田和夫

「菊薫る惠雲の里に吾一人」、これは昨年十月着任直後に私の口をついて出た初めての句である。突然の転任で、随分とまどいもあったが、ともかく着任し、夕方、勤務を終えて唯一人散歩に出る。周囲の風影はまことに美しく、道筋や家々の庭には、菊やコスモス等が咲き乱れ、空気も良く、生活環境としては全く申し分のない、よいところである。然しながら、周囲の風影が美しく、良い里であるだけに、家

族と別れての初めての単身赴任は、また、心の中にも秋風が吹く思いであり、冒頭の句となった次第である。専門家が見れば句になっていないでしょうが、私には忘れ得ぬ句になるであらうと思う。

ともあれ、着任はしたものの、聞くとは大違いで、難問山積し、眠れぬ夜が幾日も続いた。従って、宗教書や心理関係書も読みあさり、自分なりに得た結論は『幸せは吾が心に在り』と云うことであつた。

桜や菊やチューリップ等々の花には、夫々の美しさがあり、夫々の良さがあるように、職員一人一人もまた、夫々の特徴があり、良さを持つている。その良い点だけを見つめてゆこうと決心した。すると、不思議なもので、気持も随分と楽になり、皆んなも良く協力してくれようになった。園生達も、一人一人親しみを感ずるようになり、今では冗談のやりとりも出来るまでになつた。

この、五周年と云う記念すべき年に出合つたこともまた、何かの縁であるうし、楽しい思い出の一つになるであらう。人の出合とは全く不思議なものである。思いもかけなかつた人々と出合い、半年余がたつてみると、もう何年も一緒に生活してきた仲間のような気がする。

ホームに勤務する私達がとらなければならぬ仕事に対する基本姿勢は、「入所者の立場に立つて考え、行動しよう」と努力する姿勢であるといえましょう。「相手の立場に立つて考え、行動する」ための技術や知識の集積が、私達がプロの職員であることの必須条件なのです。入所者がより人間らしく、より快適に生活していただけるように援助することが、私達職員のプロたる職務内容であるといえます。

今の気持を大切に、一日一日を楽しく過したいと思つていると同様に、また、『会うは別れの初め』とか申します。何時の日かお別れる時に『山田よ、ご苦労さんでした!』と云われるように頑張りたいものだと思つています。

長 寿

事務員 宇和川 由貴子

日本の平均寿命が男女とも七十才以上に延び、医学の進歩には驚かされる。ある人は、年をとつても「まだまだ若い」と張りきつているが「もう年だ」と意気消沈し余生を送る人もいる。「まだ」と「もう」の言葉の間には格段の差があるだろう。

長生きしている人を、それとなく見ていると、身体が壮健（胃の消化力や肺活量や足腰の丈夫）で、なおかつ頭の働きが若々しいと思う。心身ともに、新陳代謝が活発である。それには平常心配しない、おこらない、無理しないことが大切である。神経質になつて、不要の雑事に追い回され、くよくよするより、おこらない気持ちを持ち、過激な運動を避けることによつて、身心の健康が保たれると思われる。だからと云つて、全然頭も使わず、感情を出さず運動をしないことではない。適度の刺激を与える事によつて、頭もさびびりに磨かれ、刻一刻と過ぎ去る時間を、最大限に生かしている人には、ボケてるヒマなどないのではなからうか。むなししい不平不満を持たず、常に自分のやるべき目的を目前におき、それに期待をかけ専念することである。「もうコレッキリ」と云う自己満足がないように。最後の息をひきとるその瞬間まで、前向きな姿勢で進みたいものだ。人生「善」「悪」は死すその時に決るのだというから――。

社会の中で、あるいは家庭で十分理解され、長寿であることが、本当にプラスになっているか、気になるところである。自分が「若い」と思つて人の考えが、本当に社会に見あう若さであるか、老人と思つ

てる人が、そうか、社会の構成も以前とは異なってくる。これから先それぞれの立場で考え、よりよき人的環境づくりに専念するように、頑張りたいものである。手をつなぎ共に生きる喜びをもって――。

「女の手」

事務員 渡部 サツキ

月日が流れて年となり。年が流れて歴史となり。ホームも五年の歴史ができました。「手」は女の歴史が表われるものと、何かの本で読んだことがある。最近、ふっと毎日使っている手に目がいき年相応の手になっているのに気がつく。風呂上りの手は、水分を保っているのを見よいが、荒仕事の手は皮膚のたるみが目立つ。顔は、心がけしだい、五、六才はごまかすことが出来るが、手は年相応の手になるという。昔、祖母の手の甲を摘むとしばらく戻らなかつた記憶がある。あの感じもそう遠くはないと思うと気が重くなる今日この頃。「手」には、「ふくよかな手」「ごつごつした手」「細い手」「小さな手」「大きな手」握れば冷たい「手」がある。冷たい手は心があたたかいと聞いたことがあるが、手が冷たいから心があたたかいのではない。男にとって、女の手の冷たさが、哀れをひとしお深くするからであって、心があたたかいのではない。女を男から区別するものは、「手」ではないかと想像されるが、女の手は、思いを伝えたり、女、独特の作業をする髪をかきあげる時の仕草等……。又、手先の器用、無器用は、ほんとうにやりきれない思いをする。手芸作品を見るにつけ、つくづくかなしい。自分の無器用さを……。茶道のお点前に、「そ

こが手なり」という箇所があるそう、で、「手なり」は「手の動きの趣むくまに」という。毎日お茶を運んでも、たとへ節くれの手でも「品よく」動きが自然に美しく、見える様に心がけてはいるが思う様にいかない。これからも生活の水をくぐっていくうちに、宝石の輝が似つかわしくない、ごつい手になるのは仕方がないが、せめて、せめて美しい手を保つため、レモンの皮を手の甲になすりつけ、マネキヤを付け、女心を持ちつづけたいと、心に叫び、五周年を一つの区切に、次の五年を目ざして、じっと「手」を見る。

就職を振り返って

指導員 徳永利一

私が三恵ホームへ就職してから早いものでもう四年目を迎えていますが、就職してみても一番かんじた事は、よく町場などで障害者の方が車椅子をこいでいるのはみかけてはいましたが、私がホームの入園者を初めて見たときにこの様な重度な障害をもって入園している方を見て大変おどろいたのは、交通事故や病気で体の不自由になった人や生れながらの障害を持つ人を見ました。そしてその中で生れながらの障害者の方に、ホームに入園する前の色々なお話を聞いているときに私は胸があつくなってきました。私はそのときにこの様な方の為に私の出来るだけの事をしてあげたいと思ひ、そこで第一に事業計画の中で地域の人々と交わるのが一番の早みちと考え、地域の人の中でもホームがあるのも知らない人もいますし、又それを知ってもらうために盆踊りや運動会等の主な行事には案内状や役場の有線放送で参加を呼び

かけて、共に楽しんでもらうよう取り組みをしてきた中で多くの人々に知ってもらった様になりましたし、慰問にもきて下さる様になってきたり手を差し伸べてくれる様にもなってきた。又月に一回はマイクロパスで社会見学で動物園や海水浴やスーパージョなどへ買物など色々な所へつれていくと、いままでのつらかった事もわすれて世間の人との対話なども出来る様にもなってきたと思うし、又毎日のリハビリをかねて、ホールへ参加を呼びかけてみんなで歌謡曲や民謡など歌う事に取り組んでみた所、最初ははずかしくて声もださなかったが何ヶ月がたってきたら声をはりあげて歌う様になり、生き生きとした明るい顔や希望までがでてくる様になりました。私はまだまだ色々な事を通じて、生がいのある楽しいホーム作りと体力向上などを目指す様な指導をしていってやりたいと思いますし、今後も地域との交流を全職員が一丸となって取り組み、明るい楽しいホームにしていきたい。

あいさつと人間関係

指導員 重藤 真 一

私達の家庭生活の中で「あいさつ」というのはそうたくさんあるものではなく「おはようございます。」「いただきます。」「ごちそうさま」「行って参ります。」「行ってらっしゃい。」「ただいま」「お帰りなさい。」「おやすみなさい。」「とこのぐらいなものです。そして「すみません。」「ありがとうございます。」「この二つを入れてもたった10コしかありません。それでは、はたしてこのたった10コの言葉が家庭の中できちんと言えているでしょうか。考えてみて下さ

い。

あらゆる人間関係の中で一番大切な事は、お互いに心を開きあっていくということです。「さあ私の中へいらっしゃい。」「あなたの中へ入って行きましょう。」「という気持ちがなければ、本当の意味の人間関係は成り立ちません。お互いの心が閉じあってしまったとき、その人間関係は喧嘩別れになる以外方法はなくなりません。この心を開きあろう上で、一番簡単で最も効果的な手段が「あいさつ」ではないでしょうか。「あいさつ」というのは短くごく単純な言葉ではありますが、この言葉一つでその日一日が楽しくなったり、逆に不快なものにもなったりするものです。このことは家庭だけではなく、職場でも言える事だと思えます。特に私達の職場ではこの「あいさつ」はこの外重要な役割を持っています。と言うのは、施設とは人間と人間が直接触れ合う生活の場そのものだからです。

私達にとって家族というのは、あまりに身近にいるせいか、お互いを人格のある個人として認め合うことをせず、なおざりにするケースが多々あります。私達のホームも五周年を迎えて、ほとんどの人がかなり長い付き合いになって来ていますし、今後もずっと付き合い合っていくなくてはなりません。そんな中で、自然と施設自体が家庭的なムードになってくる事は最も望ましいことです。しかし、ここで注意しなければならぬのは、先に陳べたように、親しくなり過ぎたために、お互いが相手の立場や人格をなおざりにするような事があってはならないという事です。そういう意味では、今後何年経とうが、お互い初心を忘れる事なく、きちんと「あいさつ」の交しあえる、良い意味での間隔や、緊張感を常に持って行動する事が大切だと思います。



当ホームにおける

カンファレンスについて

看護婦長 高石 ミヤ子

施設の入園者は、身体的肉体的に大きなハンディを背負い乍らも医療の限界をこえた人達である事は御承知のとおりであります。故に体の抵抗力も弱く、病気にかかりやすい、一旦かゝれば仲々治りにくく、思いがけなく重症になりやすい。常勤医師のいない施設においては、早期発見、早期治療のためにも、健康管理を受持つ医務室の役割は大きく、又責任も大である。園生一人々の疾患及び症状を正確に把握し、的確な判断が必要となる。

看護の道にたずさわり三十数年、今迄お目にかゝったことのない難病を持つ園生は多く、病気の宝庫とまで言われている。この様な状態の中では、処遇に対して当然ドクターの医学的な所見とPT、OT、の専門的分野の助言は必須と考えられ、それに対する学修も欠かず事は出来ない。

幸い関連病院である近くの理学療法学院附属病院の山田院長の温い御理解と熱心な御協力により昭和五十八年十月より、毎月一回当ホームを会場とし、介護及び看護上、特に問題点の多い一名を選び、家族の状況等も合わせ、入園までの経過及び現在の症状に対し、医学的、理学療法的、又介護的に検討し、学習をすると云う事が大きい目的で始まり、現在も続いております。

三月末で十八名のカンファレンスを行ないましたが、其の成果は大

きく、先づ難病と云われた数多くの病態を知る事が出来た。又理学療法的に専門分野からの的確なりハビリの方法を学ぶ事が出来た。

医学については素人である寮母さん達には時々専門語の意味が解らず、とまどう事もあるようだが、少なくとも障害者の施設に勤める職員であれば、学習は不可欠であり医学の進歩に少しでも関与出来、前向きな姿勢で取組んで行ける学習の場が与えられると云う事は、何者にもかえがたい成果と考えております。

今後の課題として、山田院長のような立派な先生をお迎えしてのカンファレンスに一人でも多く出席して、活発な研究討議が行なわれ、園生一人一人の処遇及び介護に充分生かす事が出来るよう、今後共努力して行きたいと思っております。

五年間をふりかえって

看護婦 八木 幸子

三恵ホームが開設されたのは桜咲く四月、私が看護婦として就職したのは青葉かおる五月でした。私は施設が開設される数日前、自分がこれから働こうとする施設の中が見たくてそば迄来て見ました。筈はかかっていましたがガラス越しに中を覗いて見ますと、そこには滑べるような光沢をした広い長い床が張りめぐらされその壁際窓際には、不自由な身体を支えるためであらう手すりが限なく取り付けられ、脇には今迄あまり目にしなかった新しい車椅子がぎっしりと折り畳んで並べてありました。その冷たく光る車輪に見入りながらなぜか身体が

硬くなるのを感じました。それから早くも五年、不安、戸惑い、期待の中で病院から施設の看護婦に脱皮しようとする努力の日々でした。三恵ホームに勤務し始めの頃は病院も施設も変りはないと片意地的な信念を持っておりましたが、一年二年と経過するにつれて大差があることを身を持って知らされるようになりました。重度の障害者がいろいろな病因に誘発され看護の甲斐もなく死に至る時これほど悲しいことはありません。看護婦という立場上病院と違った責務の重さがつくづくと身にしみることがあります。その反対に徐々に回復に向い健康を取り戻した時は、病院でかみしめる何倍もの喜びを感じます。働き甲斐を感じます。又その間には各地で開かれる療護施設研究会にも出席することができ、園生の困難な処遇に当たった時、自分の家として家族として考えれば自ずと解答が得られるということを学び、施設では知識技術は二の次で大切なのは愛であり心であると教えられました。療護施設は研修の場ではなく実践の場であり療護職員は実践する人であると知らされました。むつかしい理屈を並べたり研修討議に費やすよりも、暖かい手で身体にふれじかに接することの方が実のある介護であり看護であるといえましょう。言うは易し行いは難しと言いますが、『今自分は何をしたら良いか』という上司の言葉を常に頭に置き、明るく優しく振るまうことを信条とし勤めて行こうと思えます。それと同時に五年前ガラス越しに見たホームの中で、今共に泣き笑い家族のように助け合って行く人達の少しでも手助けになれることを喜びとして頑張っていきたいと思えます。



今思う事

栄養士 山之内 啓子

社会人一年生の頃、毎晩ぐったりする程、体は疲れてまぶたも重いのに、なぜか頭の中だけが興奮して寝れずに布団の中で、「あっ」というまに過ぎた一日の出来事を思い返しては、赤面したり反省したりしていました。

また、基本的な仕事も満足にこなせないうちに、あれも試してみよう、これはどうしようかなどと気持だけが逸って、はがゆい思いをしていました。

五回目の春を迎えて懐しく思う反面、一日が日課通りに過ぎて行き、新しい試みなどとは、ほど遠く、あの頃の意気込みがうらやましく思ふ事があります。

料理の種類も、手順も、行事計画も、すでに実施してきた通りの繰り返して、あまり頭を悩ます場面も少なくなりました。

時々、栄養士の研修会などに出席すると刺激されて、少し奮起するのですが、いつのまにか……………。

今五周年の文集を書くに当たり、初心にもどって、トライする精神、を常に持ち続けたいと思います。

そして、もっと柔軟に新しい方向から物事を見つめられる目を持ちたいと思います。

とかく私達は、先例に捕われがちですが、先例も私達が作ったのですから、実施のたびに、検討する必要があると思えます。

三恵ホーム五周年を迎えて

寮母 宇和川 八重子

恵雲の里に三恵ホームが開設されて早くも五周年を迎えました。ホームほどの居室も南陽をうけ谷川のせまらぎが聞え、春はすぐそばにワラビが生え、垣根には園生の優しさがこもった心づくしのパンをつまきに小鳥が毎日のようにきてさえずっています。開園当初は角野荘の寮母長や、主任の業務指導をうけ、一日も早く仕事を覚えて園生にしたわれる寮母になるよう努めてきましたが、年がたつに従って処遇の難しさを改めて痛感しています。人それぞれ顔形が異なるように性格や障害の程度も違い、その心の中を読み取る事は難しく、時間がかかりました。特に言語障害者とのコミュニケーションが難しく、私の話は通じて、園生の言葉が聞き取れないことが度々あり、相手の立場になつて根気強く聞いてあげるよう努力しています。意志疎通の全くできない人に対しては、おむつ交換時にお尻や背中に発赤は無いか、顔色や発熱、特に体位変換に気を付け異常を発見した場合直ちにナーズに連絡するなど褥瘡の予防に心がけています。また平等な処遇に留意しているほか、それぞれの障害に適した介護に心がけ、時には友となり母となつて接し、相手の気持を十分理解尊重するよう努力しています。全失語者のAさんは寮母の言うことは通じますが自分の思っていることが表現できないため、問いかけに対して動作で答えてもらうようにしている。

気難しい人ですが側にゆくと必ず私の手を握り何か云いたそうにするので色々問いかけ、お互いの意志疎通がはかれた時は嬉しそりに

何度も手を握り返します。私は機会があれば必ず一言声をかけ手を握つてあげるようにしています。寮母は先づ園生の言い分を聞いて、心理面の動揺や不安を和らげてあげ、たとえ言葉がなくても心が通じ合うより日常のコミュニケーションに気を付けて、できれば残存機能を維持させたいと思う。上司のお話のとおり「忙しすぎで心の健康を失わず他人の心と協調すること」との教訓を胸に介護に当り、また、家庭生活でも忘れないようにしたいと思っております。

五周年に思う

寮母 渡部 コマ子

五年間を振り返り見て此の川内の山合に建てて、下さった、三恵ホーム。空気のきれいなそして静かな、青葉若葉の目の保養になる快適なところで、障害者の皆さんと毎日を過して参りました。朝がくると、「今日は自分は何をするのかな」と、まづ仕事のことを考える、それで勤務表によつて仕事に付くのであるが、まづ少し早く来て担当の部屋に行つて、「お早よう」と声をかけ、皆んなの顔色を見たり、花瓶の水をかへたり少し用をして、それからラジオ体操を園生も全員で行う、引継ぎを受け其の日の仕事につく。リハビリは何かなあゝと思ひ乍らそれぞれと障害の方達もリハビリやクラブ活動にと、日によつて歌ったり、オセロ、将棋、陶芸、手芸、俳句などを、又社会見学では、山に海に町にと出かけ楽しい、ひと時を過して参りました。何を云つても体の不自由な障害者だけに、ともすれば体に病をおこし病院に行かねばなりません。そんな時は可愛そうであるが、しかたないなと思ふこともある。こうした事に職員皆んなで園生の手となり、足と成り、

私も私なりに仕事をさして戴き月日が立ち早くもホームと共に五年に成って参りました。園生も自分でリハビリの出来る方もいるが、私達で一処にしてあげねばどうしても出来ない人も沢山おられるので、「一生懸命頑張るのよ」と力づけながら励まし、こうして毎日がくり返されて来ました。園生の喜びが私達の喜びでもありますので、ついつい無理をして体を悪くする職員もいます。お互に体には気を付けねばと思います。この五年間、我れながら良く頑張ったなアと思うと同時に、三恵ホームが何時までも明るい楽しいホームであることを祈ってやみません。

開園五周年を迎える恵雲の里

寮母 緒方 豊子

道後平野の東部「川内町」人口「二万余り」則之内恵雲に、開園されました当ホームは、国道十一号線より約「一〇〇メートル」程、はいつた緑濃き山々、又谷深き井内溪谷のせまらぎの音を耳にしながら、春夏秋冬を楽しませてくれる小鳥達、ある時は、居室裏の芝生のジュータンに飛来し、園生のあたえる、パンや、果物等を、美味しそうに食む様は、野鳥ならず、「ベツト」の感すら致します。

こうした静かで自然に恵まれた環境の地に、身体の不自由な方々の生活の場、生き甲斐の場として誕生し、こゝに「五周年」を迎えられました事は、入園者の皆さんの日常生活の中で、手となり足となり又、ある時は母親の立場になり、時には厳しく又優しく、愛情を持って介護に携わっている職員に取りまして本当に、しあわせを感じる次第で

ございます。今後も、健康に留意されまして、残存機能の維持のための機能訓練、そして社会見学、各クラブ「陶芸、手芸、俳句、園芸」等に励げまれて、明るく歌声の消えやらぬ生活を楽しんでいただき、お元気で十周年、十五周年、を迎えられます様、園生と共に頑張りたいと思います。

創立五周年を迎えて

寮母 長曾我部 恵子

身障療護施設三恵ホームが創立されて、早五周年を迎え、長いようで短い月日でした。開園当時は入所者も少なく、寮母は九名でした。私は以前義父が病の床につき、看病の経験もあり安易な気持ちで入りました。病院での看病は一对一でしたが、福祉の知識も無い私は、とまどうことも度々ありました。園生それぞれ物の見方や考へ方が違い、また障害の程度で介護も違い、年がたつにつれて、処遇のむつかしさを感じています。食事、入浴、排泄の介助などは詳しく、寮母会や処遇会を持って話し合をしたり、また他の施設見学により知識を得、理解できるようになりました。自分の家族だと思ひ誠意を持って、介護に当たっています。当ホームは重複障害者が多く、再発の恐れもあり、特にトイレで転倒などさせない様に気を付けております。何もかも全介助してあげるのは、真の介護ではなく、自分で出来る事は本人にしてみもらい、時間がかゝっても、気長くそばで見守っている様に努めています。現在では自主的に、リハビリや、クラブ活動にも参加してくる様うになり嬉しく思っています。元気な園生は野菜作りを手伝っ

てくれたり、カーテン開けや、おしほり配り、コップ配り、また食事の後片付け迄、手伝ってくれて楽しい毎日が送れるようになりました。またなかには身体が硬直しつゝある人がおり処遇がむつかしくなつて来ています。

全失語障害者は、お茶がほしくて、云う事ができず、蝇がとまつてもすぐ追う事が出来ない。私はこの人達の手足となつて心からの愛情を持ち接しています。寮母はまず、園生の云いたい事、してほしい事を、把握することが大切で、一人一人が確固たる信念を持つて職務に当たりたいと思つております。喜ばしい事ですが、園生の一人はホームを退園して授産場に入り、元気で毎日動いている人もおります。私達もその人にまけないように、園生共々健康管理に気を付けて処遇や介護に当り、共に笑つて毎日をすごして行きたいと思つております。

家庭平和は施設の平和

寮母 高橋 ヤス子

豊降石鎚山を遠く東に、重信川を西に見て、この三恵ホームと共に五周年。園生達は、機能訓練、唄うりハビリ、各クラブ活動に自発的に出席、又三ヶ月交代の当番を自主的に作り、積極的に、協力をしてくれる。程度の違う障害を持つ園生にとつて何かを継続して実行することは勇氣のある事です。勇氣ある園生は、明るさ、優しさをも持ち、また、自己の向上にも常に努力しています。これは心の内から自然に湧き出てくる力であろうか。私は何か事が起らなければ勇氣は出て来ない、本物でない証拠である。

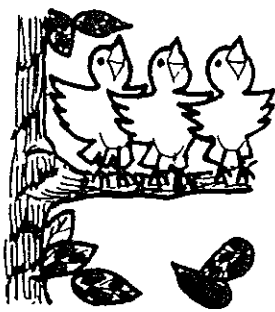
この様な園生達と生活を共にし、自分の品性向上に役立たせる場としての職場で働いているということはこの上無い喜びであり、感謝と共に心新たまる毎日です。

両親の世話が出来なかつた私は、壮年になれば人様のお世話をさせていただきたいと思ひ、ホームの職員を希望し就職しましたが、勤務が長くなるにつれ怖くなった。それは、相手の心を受け入れて人の立場になつて考えることが出来るだろうか、どこ迄親切にしたらいいのか、その限界は、などと考え、又信頼を得られるか、他人の言葉を聞き入れ、自分の心をおさえてお世話出来るだろうか。等々……。

不安な心でいっぱいでした。

毎週一回のミーティングがあり、愛、生きがいについて度々お話をされました。心使ひの難かしさが毎日私の宿題となつた、「腹が立つ時じつと堪えよ三分間」をいつも心にとめる。今迄これ程深刻に考えた事がなかつた。簡単な様だが難しい。この心使ひを私は、一生の目標に決めました。

六十年度は中四国職員研究大会を控えておりますが、五年たつて、いまだにこんなことかと、介護の未熟さに自分自身反省の日々です。どうか、この大会が無事にかつ盛大に終らんことを祈りつゝ、一日一日の勤めに精進したいと思ひます。



五年を迎えて

寮母 神野 友子

私が当ホームへ就職して、早くも五年が経ちました。最初は、何もわからないので、たゞ仕事を覚える事、慣れる事で、無我夢中でした。

月日が経つにつれ、人間関係の難しさが身にしみて来ました。私に取っては、この五年の間には、色々な事が、ありました。

嬉しい時、悲しい時、又イヤな思いをした時数々ありました。時には、もう、「辞めてしまいたい」と、思った事も、ありました。そんな時に、「負けずに、頑張ろうね。」と、優しく声を、かけて下さったのは、同僚達でした。私にとっては、この一言に、勇気づけられました。

最近では、クラブ活動も、盛んになりました。手芸をする時は、二人が一組になり、一つの物を、作り上げる事によって、楽しく生きがいを感じるのでないでしょうか。又時には、社会見学や、買物訓練等、家庭に居る時など、出来ない様な事もしています。社会見学に行く時等は、まるで、子供の様に喜んでいきます。この人達は、障害の軽い人達です。

その反面、年が経つにつれ、機能が、低下して、寝たきりに、なる人も居ます。又、病気を起し、入院される方も、多くなりました。その都度、看護婦さんが、その人について、色々と、介護面のご指導をして下さいます。私は、しみじみと、介護をする事の、難しさや、大切さを、痛感いたしました。

今後共に、ご指導を、お願い致します。

福祉施設の職員として

寮母 由良 スミエ

五十五年開園と同時に期待と不安を胸にして職場に入り、当初は何にも解らないまま、自分なりに一生懸命働いて来たと思いますが、年を追って行く程に処遇面、介護面も難かしくなり、私のような未熟者が勤まる所では無いと痛感しつつ、満五年が過ぎ、今ふり返ればいろんな勉強やら体験をさせて頂き有難い事だと感謝致しております。私の思う事はやはり福祉施設で働く者にとって特に家庭の和が一番大切だと思ふ。いつも夫婦喧嘩や親子の間に心配事があったりすると職場でそのまゝ顔に出てくる場合もある。これでは相手の方に悪い感じを与える事は確実です。私にも一度「ハッ」とするような事を云われた経験があり、これではいけないと反省しました。その後は嫌な事があっても顔に出さないよう努めています。ある先生の講話で「夫婦とは百円玉のようなもので表と裏があつて始めてその価値がある、表ばかりとか裏ばかりでは一円の値打もない」、成程そうである。「表と裏」が助け合つて一人前の価値が出るのだと云う当り前の事が始めて解つたように思いました。ともすれば忘れがちな当り前の「感謝の心」これは家庭でも職場でも一番大切な事だと思ひます。この先生のお話は一生自分の心に大切に仕舞って置き度い。これから先、定年まで無事勤めさせて戴けるなら、まだ十年余りありますが、徐々に福祉関係にも厳しいしわ寄せが来つゝある昨今、十年後はどんなに変わって行くの

だろりと考へれば何か怖くなって来ますが、十年後はさて置き、今の一日一日を大切に対応して行く事が私達の務めであると思えます。今後は自分の短所を少なくし、健康に注意して、人間性を高めて行くよう努力して行き度いと思っております。

五周年記念

寮母 高橋喜代子

何の経験もない私を寮母として採用していただき、これでいいのだろうかと色々考え悩んだりしました。

でも、採用していただいたから、新居浜角野荘「老人ホーム」に二泊三日の研修をさせていただきました。ホームや施設と言う所は、一度も見学した事もみたくありませんが、採用していただいた以上一生懸命やってみようと決心しました。

老人ホームとちがいで身体の不自由な人達なのでとても心配でまた、なれない仕事なので、なれる迄が大変でした。

少しづつ馴れて、一年過ぎ、二年過ぎ、三年目に三周年記念をして大好評でした。

一年間の行事では、花見、盆踊り、運動会、お餅つき、クリスマスと、園生も毎月楽しみにして喜んでくれています。が忙がしくて、やりがいがあります。

一ヶ月の行事計画もだんだん増えて忙がしく園生の誕生会「毎月二十五日」社会見学、買物訓練、オセロ、将棋大会、俳句、手芸、その他毎月の誕生会にはリハビリの時間にホールで日頃その日の為に練習

した歌のカラオケアトラクションがあります。園生も不自由な身体に負けず懸命に生きようと頑張って笑顔で毎日楽しく過ごされております。

私も、負けない様にこれからも頑張りたいと思います。

明るく頑張って居ます。

寮母 渡部ユタカ

花瓶に入れたレンギョウの花に、やわらかな陽がさしている、食堂の一角で今日も楽しい笑い声がきこえている。手芸クラブの園生と寮母、参加園生は十二〜三名位であるが後遺症の片麻痺のため、片手しか使えない者が大半で、両手の使える者は四〜五名、その人達も指先の痺れる者や力の入らない者で、皆んな重度の障害を持って居るが、気持は本当に明るい。一本のひもを結ぶのにも、健常者には考えられないような方法で、両方から引つ張り合い、口でくわえて頭をコツツンコして笑い乍ら、上手には出来なくても、一つ一つ物の形を作って行く。側で介助している寮母も、なるほど、と教えられる事が度々ある。

毎年九月に行われる県福祉展、十一月に行われる川内町文化祭の出品作品をと今から一つ一つに取り組んでいる。一つのが出来上がった時の、あのよろこびと、目のかゞやき、無限の可能性を秘めたこの人達、この園生達を、皆んなで、明るく、強く守っていこう、ホームと言う大きな家庭の中で。

昨日よりも今日の向上と、生きがいを願っている園生のためにも。

五周年を迎えて

寮母 山下清香

風がこちよく、ほほをなでて通り過ぎて行きます。我がホームも五回目の春を迎えました。この五年間に折りにふれ職員と園生との信頼がうまれ、和やかな雰囲気が出来てきました。何ものにも代えられないものです。

振り返り今思えば園生は、入園当初自分の事のみ考えていたように思います。しかしホームの生活に馴れるにつれ、重度の障害にも負けず、自分で工夫や努力をして、一生懸命に頑張っている自分よりも障害の重い人を見て、自分の努力のたりない事に気が付き、他の人を思いやる気持が出来てきました。

今、私の心に残った事の中に、O君とB君の事があります。O君はよく汗をかきます、O君が自分でふくことの出来ない汗を不自由な手で、ふいてあげるB君、なにげない動作に私は胸を打たれました。人と人のつながりはこうありたいものです。

今は機能回復訓練はもとより、二年前に始めたホールでのカラオケも自主的にするようになりました。初めは声も小さく、マイクを持つのも恥ずかしくていましたが、今は誕生会の「アトラクション」には、プログラムを組むことから司会まで、園生が自分達でするようになりました。このような進歩を喜んでいきます。

又私達寮母も、行事があるたびに、これで良いのだろうか」といつも反省をして「次にはこうしたらどうだろうか」と懸命に考え、未熟な私達も園生も、ホームでの生活を人間形成の場として一日一日を過

ごして来ました。共に考え、共に喜び、悲しみ、助け合い、上司に教えをこい、そして今があります。このような明るいホーム、すばらしい職場に勤められているということを幸せに思っております。

三恵ホーム五周年を迎えて

寮母 菅野サツエ

ホームに勤めさせて頂いて、五年になります。十一月の寒い日、希望と不安を以ってまいりました。姉が六ヶ月先に勤めていたので、姉の仕事は、もう立派に見える、私に厳しく指導してくれませんが、いつて行く事が出来るかなと、不安な心になった事も度々でした。園生と仲よく、何でも話せる、よい寮母になろうと懸命に働き、五年の年月があつというまに過ぎました。歌のリハビリ訓練、手芸クラブ、俳句、お茶、オセロ、将棋、機能訓練、一つ一つ園生と共に覚えてきました。声を出して歌う事ができなかった方でも、歌の訓練で今は高い声で上手に歌えるようになりました。手芸では、一人は右手、一人は左手で助け合って、仲よく、頑張っております。ほんとに仲の良いホームだと思えます。指先の鍛錬にもなると思ひ、今後福祉展、町内の文化祭などで、いろいろな作品を多くの人達に見てもらえるよう作品作りに励んでいます。

Aさんは、入園当時はベッドで本を読んでおりましたが、其の後食事のあとかたづけ、野菜作りのお手伝いをするようになり、或る日、社会に出て働きたいと申し出があり、本人の希望で、東予市希望の家で働くようになり、五十九年五月三日に行きました。お正月には、園

生職員に逢いたいといって泊りがけで来られました。仕事は楽しいと大へん喜んでいました。ホームから社会に出て自立させようと努力する職員、整備された機能訓練設備、栄養充分な食事等の御陰様で立派な方が自立された事を喜んでいきます。これからも一人、一人に気を付けて、リハビリ訓練、クラブ活動に努力して行きたいと思っております。

障害を理解することの大切さ

寮母 大島 嘉子

寮母として採用された当初は漫然として、園生のお世話をさせて頂きましたが、皆それぞれに容姿が違う様に一人一人障害が異なり大変な毎日でした。

「処遇ヤリハビリ」その人に見合った生活があるはずであり、それを一つ一つ手づくりして行くことを障害を理解することが基本であり、最も大切なことだと思います。例へばナースコールで呼ばれて行くとき、すぐ頭のそばにある物を取ってと訴える、「すぐそばにあるでしょ、よく見なさい」と云う様な対応になってしまふ事が以前はあった訳です。半盲について理解した後はそうした接した方はしなくなつた、障害者にとってみれば見えなから取ってと訴えているのに、自分が怠け者であるかの様に思われる、そして自分の事を良く理解してくれない更には悪意を持っているのではないかと思つてしまいます。無理解な人達に介護されては落ち着きも余裕もなくなります。障害者が心理的にも落ち着いて生活するためには何より介護する私達がその

人の障害というものを、ちゃんと理解することが如何に大切かが判りました。

そして心身共に安定した生活をしてこそはじめて、機能訓練をして、もっと元気になろうといった気持が出てくるのではないのでしょうか。どんな重度な障害者でも自分の喜びや悲しみが有り、今あるがままの自分が認められています。

私も体の続かぎり皆様のお世話をさせて頂き明日に向つて邁進して行きたいと念願しております。

五周年を顧みて

寮母 長曾我部 美代子

三恵ホームが開設されて早くも五周年を迎えました。私も寮母として勤務し四年余りになります、何んの知識もなく不安でしたが、皆様のお陰で今日迄これました事を感謝して居ります。

二十代から六十代の幅の広い年代層、今迄家庭に居られた方、病院生活の長い方、それぞれ環境、個性の違いがあり、又他人の世話の難しさ、戸惑いを感じました。特に言語障害を持つ人の言われる事がわからない時、相手も自分もあせり、余計わからなくなり、他の寮母さんに助けってもらつてはつとずする事が度々あります。顔が違うように性格も違い冗談のわかる人、わからない人、言葉使いが如何に大切であるかしみじみ感じます。

ベット上で殆んど身辺の事をされる方、口で折紙、ビーズ通し、ハサミも使われる園生が居られますが、ほんとに長年の生活の智恵のよ

うなものを教えてくれます。マンネリ化になりがちな園生の余暇活動として俳句、手芸、オセロ、カラオケがあります。俳句は池川、高須賀両先生の御指導に依り、四季の感じをそれぞれの感覚で織り込み句集にもしています。手芸は寮母と共に自分の手で作る喜び、又自分の作った物が作品展に出品される喜びを味わい、それぞれが生きがいに通じるものでわないかと思います。カラオケ大会等はストレスの発散の場であり、自分好みの歌が歌える楽しみの場でもあります。

寝たきりの人に対しても、より快適に過ごしてもらえよう清潔にするとともに出来るだけのスキんシップに心掛けて行きたいと思っています。

思いやりの心を大切に、相手の立場になって、安心した日々を過ごせるよう勤めて行きたいと思っています。

五周年に想う

寮母 渡部 千代子

桜の季節も終り、新緑の今日此の頃、五周年を迎へるにあたり、職員として本当りに喜ばしく思っています。縁あって私が、三恵ホームに勤務する様になり、五年余りの月日が、流れ今日に至っている訳ですが、此の間当園の発展は、施設設備及び、文化面又、地域社会での地域交流も年々発展して来ました。所で、私の日常生活の介護ですが、入所者の障害が個々に違ふ為、まず個人の動作能力と、介護技術を学ぶ事から始まりました。障害者の名前を覚え、何が出来るか、何が出来ないか、細かい評価を理解し入所者の日常生活の世話、健康面や精

神面にと、施設での基本ともいえる自立援助に、毎日を繰り返して送ってきました。障害者の障害の克服は、まず自分で努力してやろうとする意識、肉体は動かさなくては動かなくなる、その為には、出来るだけ自分で努力させる事の重大さ、すぐに介護手助けするよりも、あえて介護しない事が、大きな愛情である事も知りました。入所者がある行動動作をやり遂げた後の励ましの言葉や誉てやる一言が、入所者にとって、大きな影響を及ぼす事も痛感しました。介護する私にとって、この様な時がとても嬉しい事です。又園生の家族に対する関心は高いようですが、しかし、悲しい事に家族との連絡や面会は、年を経るごとに、少なくなっています。お盆や年末年始の帰省者も少ないです。家族との連絡も、より密にして入所者の園での生活がより一層楽しくなる様頑張つてゆきたいと思つている次第です。

五周年を振り返る

寮母 緒方 トキエ

昭和五十六年二月勤務、何も出来ない無学な私。園生のお世話が出るものかと不安な気持ちでした。名前を覚えるのに一生懸命でした。一ヶ月もかかりました。園生の障害もいろいろですが、皆さんとつても明るく素直な人ばかりでした。仕事を早く覚え様と一生懸命頑張りました。とても優しい先輩が手に取る様にして指導してくれました。介護、排泄、入浴いろいろお世話させて頂き、日の立つのも早く感じました。現在では、クラブ活動では、手芸、お茶、俳句、焼物、園芸、いろいろありますが、障害にも負けず一生懸命頑張っています。特に

手芸のとき、不自由な手で、二人が一組になり楽しそうに作っている姿は、とっても美しく涙が出ます。又、一番の生きがいとして機能訓練はもちろんのこと、歌のリハビリが生きがいの様です。月一回の誕生会には、自分達でプログラム作り、司会もしている。職員は、楽しく見えています。又買物訓練、社会見学、花見、運動会と、年間行事は、沢山あります。野外活動には、厨房が愛情こめて作った手作り弁当をひろげ、嬉しそうに食べている姿を見ると涙が出ます。その時、世話のしがいがあり、一段と元気が出て来ます。話しは変わりますが、ホームに務めていてよかったと思う事があります。それは、お姑さんが、大病し入院しました。現在は、退院し家庭養生をしていますが、介護について、少しも苦になりません。これも園生の世話をしているおかげだと思います。これからも、一生懸命頑張り、明るいホームを作り、障害者の気持になり、手となり、足となり、頑張っ行ってきたいと思えます。

響き合いなながら

寮母 中川 時子

緑豊かな自然に囲まれた三恵ホームも六十年四月で設立五周年を無事に迎えました事は誠に、おめでたい事でございます。

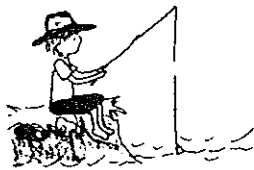
私の夢でもありました身障者療養施設の寮母として勤めさせて頂き、今一度初心にかえり反省の時期にあるように思われます。

私も子育ての頃、ある保健婦さんのお世話になり、其の熱心な職務への態度に触れた時より、社会福祉の仕事に魅力を抱いていたもので

した。ホーム設立後、一年遅れて就職致しました私は、只「アッ」と言う間の四年間でした。しかしこの仕事に何の知識も持たない私は、あらゆる面において不行届きがあり其の都度、先輩に、ニューモラルの指導を受け勉強させて頂きました。大勢の方々との良き出会いに感謝すると共に、寮母の仕事は園生とのコミュニケーションの大切さを痛感致します。

最近では機能訓練においても、入園者の方々が自主的に行動する様になり、ホールのリハビリは、各自がマイクを手に自慢の歌を唄うひとときなど、このホームに欠かす事の出来ない憩の場でもあります。

此処で少し私の所見をのべてみたいと思えます。昭和五十六年一月入園、彼女は手足が不自由な為、口で折紙をしたり、ビーズ玉を通してアクセサリーを作るなど忙がしい毎日です。入園当時は精神的に不安定で、お互いに苦しい時期もありましたが、さて、何が彼女の心を薔薇色に染めているのでしょうか。それは小さなビーズ玉ではないのだろうかと思うのです。「寮母さんまた出来たよう」と言うAさん、そこには素晴らしいビーズ玉の指輪が完成しているのです。その満足した横顔を見る時、園生の幸せは私の幸せでもあり同じ屋根の下で苦楽を共にする者同志の充実感でもあるのです。お互いの胸に響き合いなから過す毎日こそ、有意義な人生を築き、明日への幸せにつながるものと信じます。今後も今の気持を大切にして頑張っ行って行きたいと思えます。



誕生会について

寮母 菅原 フジエ

すがすがしい朝です。「おはよう」、「おはよう」、四方から明るい園生のあいさつが聞えてくる。八時四十五分から、ラジオ体操が始まる。リズムに合わせて、手足の運動で体をほぐします。今日は、何だか、園生の顔が楽しそうに見えます。そうです、待ちに待った誕生会の日です。きちんと身仕度をして待っている。第一部は、十一時三十分に、食堂へ集まり、上司の方から、お祝のお言葉をいただき、ビールやジュースで乾杯、厨房からの手作りの心のこもった御馳走を、頬張りながら、音楽の流れに合わせて、食事をする。第二部は、十四時から、アトラクションが始まる。日頃、朝のリハビリとして、歌の練習をしている、歌謡曲、民謡、童謡と、さまざまな歌を歌っている。その中から、自分の得意なのを選び、毎日鍛えた喉で、中には、自分専用のマイクを持っている。沢田研二や、マッチの物まね等、きれいに化粧し、大きなイヤリングをつけ、手振り、身振りで踊っている園生もいる。あまりの感激で、アーアーと言って、大きな口を開け、涙をぼろぼろ流したり、大変な騒ぎです。言語障害の人でも、歌であれば、ゆっくり歌えるし、手足の不自由な人でも、それなりに、体を動かしている。最近では、司会も、園生同志が、順番で交代して、張り切っている。プログラムも順次進行して行き、全員で賑やかに、最後をかざり三時半頃までかかり終了する。今日の出来、あいはどうであったらうか、皆さん、一応胸に、いだいているだらうと思います。また次回は、こんなふうにとか、色々と考えて計画をねっているだらう

と思います。来月の誕生会を、楽しみに待っているようです。

創立五周年を迎えるにあたって

寮母 菅 マチエ

三恵ホームが創立され、今年で五年目を迎えると聞いて月日のたつのが早いのに、唯、驚くばかりです。私も当ホームに寮母として働かせて頂くようになり三年になります。その間には先輩方の優しい御指導を賜り今日に至っておりますが、様々な面においてまだまだ戸惑うことばかりです。

当ホームに勤めさせて頂いた間には、色々なことがありましたが、私なりに振り返って見ることにします。桜の花の咲き競う春の日には、お弁当持参で郊外に出かけ、園生のみなさんと一緒に大きな輪を作り、歌ったりゲームをしたりして楽しく一日を過ごしました。夏の夜には地域のみなさんと交流を深めるために、盆踊り大会や花火大会を催したことが思い出されます。大勢の御参加を頂き、園生を中心として、幾重にも輪を作り、それぞれ盛大に行うことが出来ました。稲穂が首を傾げる秋には運動会です。練習してきた成果を披露する園生の顔には、満足の笑みがこぼれます。紅白に分かれて競われる応援合戦は、一段と盛り上がりがあります。

また、園生のみなさんは、年間を通じて機能訓練やクラブ活動としての俳句、茶道、手芸、焼物、カラオケ、将棋、オセロなどにも一生懸命取り組んでいます。そのひたむきな取り組み方が、私の毎日の仕事の原動力であるといえるでしょう。私のようなものでも必要として

下さる入園者のことを思いますと、一日たりとも疎かにすることは出来ないと心に鞭打って毎日頑張っております。当ホームは高台に位置し、空気が澄み、静かで療養するには本当にうってつけの場所だと思います。寮母の立場と致しましては、入園者が一日も早く機能を回復して自立出来る日の来ることを願ってやみません。

どうか今後共よろしく御指導下さいますようお願い致します。

出逢い・めぐり逢い

寮母 玉井とし子

―逢うは別れのはじめなり― よく言われる言葉ですね。

「別れ」と云う言葉は辛く悲しい感じがしますが、「逢う」「出逢う」とは、何か新しい気持が、期待があつて胸がわくわくしませんか。

最初に当ホームを訪れたのは、面接の時でした。

五十八年の六月二十九日、玄関入り口に、大勢の園生が出て、カラオケを楽しんでいましたね。

障害者の施設と云う事で、暗いイメージを抱いていたのですが、元氣いっぱい、笑顔いっぱい、まあ！なんと明るいことと驚いた次第です。

採用が決まり、七月一日より勤める事になりました。何もわからぬ私が、先輩寮母さんや、皆様方のご指導のおかげで現在に至っております。

園生の皆様方に、出逢い、めぐり逢えた事、職場の皆様方とめぐり逢えた事を、私の人生のプラスの材料として、一段一段ではあります

が成長していきたいと思ひます。

これからも続くであらう、出逢い、めぐり逢いを大切にしてい、その人、その人なりのプラス面になるよう精進したいと思ひます。

最後に話が変わりますが、私が当ホームで働けるといふ背景には、両親、主人、子供の理解があつたこと、感謝すると共に、家族の意志に反しないよう職場での一日一日を大切に、少しづつでも向上していきたいと思ひます。

心のつながり

寮母 中川幸子

安全で快適な日々の生活。

毎日が潤いと喜びが感じとれる楽しい生活の場、三恵ホーム。こゝで働らく私達は、入所者に対し、単純な同情や、感傷ではなく、この人達の立場になつて考え、深い理解を持つとうとする心、人間愛の精神に徹し、この人達と共に生きようとする意気込みで熱意を持つて接しなければならぬ。暖かい善意な態度を持ち、この人達の願いや訴えを良く理解し、優しく受けとめる態度も必要であり、又、心の痛みとして受けとめる心を持つゆとりも必要であらう。この人達と共に喜び、励まし、そして、慰めを表わす態度など表現の仕方を身につけること。お互いにヒューマニズムの精神で接していれば、自然に心のつながりも強くなつて行くのではないだろうか。人間は他人の非合理的な態度については指摘できても、自分の非合理性については気付きにくいものです。自分の性格、短所、価値観などをよく自覚して接しなければなら

ない。これらの事は、介護上の基本であるにもかゝらず、自分自身の心と行動が、アンバランスに揺れ動くことも度々である。まだ、職員として、一年余りの私ですが、良き先輩方を見習い実践しなくてはならない。入所者との心の交流を大切に良き職員として、頑張ってきたいと願う今日この頃です。

ひとつの出会い

寮母 野中 敏子

自然の豊かな緑に恵まれたこのホームに、期待と不安をいだきつつ、訪れてから早二年目を迎える事となりました。

私が、三年前骨折で入院した折、同室の五十歳の女性が、脳卒中による言語障害の為殆んど唸り声に近い発音で、人との意志の疎通が計れず嘆いておられました。そこで先ず、五十音表を作り、それを指差しながら音の補強をし簡単な日常会話の練習を始めました。数日たち今度は書く練習です。思う様に動かない自分の体に悔し涙を流しながら、震える左手に鞭打ち一字、一字……。

二年程たって面会に訪れた私は、以前よりずっと聞き取り良くなった彼女の言葉に嬉しさと感動を覚えると共に、息子や孫の写真を見せながら不自由な身体を抱えた老後の不安を語る彼女の胸の内を考えると、何とも言えない淋しさと、個人の力の限界を感じるのでした。

しかし、彼女との出会いが、又、筆記用具を胸に通院の私を待つ彼女の努力と熱意が、微力ながらもこうした方々の手助けをしたいという私の心をかり立て、このホームの門を叩く力と、今日の充実した日々

を与えてくれたのです。

当初は想像を超えた現実の厳しさと、初めての経験に戸惑いと焦りの毎日でしたが、日増しに心を開いてくれる園生達に励まされ、今は大きな一つの家族の様な気持で介護に当らせて頂いて居ります。数々の問題を抱えた社会福祉の道ですが、皆と共に明るい未来に向って努力したいと思っています。

毎朝、園内にお祭りしてある「姪子神社」に向って『今日一日皆と共に無事で過ごせます様に』と手を合わせる。ドアを開けると「おはよう」という園生の爽やかな挨拶と笑顔に迎えられる。前日の引継ぎを済ませ、寮母としての一日が始まります。

五周年をふり返って

調理員 渡辺 光江

「ごちそうさま、おいしかったわい。」

「ようおあがり。ぜんぶ食べた？」「たべたよ。」園生かっちゃん、私の食後の会話です。かっちゃんは、手足が不自由で、車椅子の操作も上手に出来ない状態です。

最初、私はキザミ食を見た時、びっくりしました。栄養士が、「居室の寝たきりの方の食べる所を見て来たら。」といわれ、なるほどと、キザミ食の必要を痛感しました。

和風、洋風、中華風と、いろいろ献立に基いて食事作りをします。園生が少しでもよるこんでおいしく食べてくれるようにと、心を込めて作っているつもりですが、日によって残飯の多い時、少ない時とあ

ります。多い時は、がっかりします。どうしてでしょう。肉類のきらいな方、魚のきらいな方、牛乳を飲まない方、といろいろあります。栄養士は苦勞して少しでもよく食べるように又、飲むようにと努力している姿がよく分かります。献立表を黒板に書いていますので、中にはいつもドアの所まで来て、「今日は何？」と聞いて聞きます。食事の支度をしながら細かく答えます。自分の好きな食事の時は、だまっで帰りますが、きらいな時は「アーアー。」と聞いて帰ります。本當に食事を楽しみにしているのがよく分かります。人間として、この世に貴重な生を受け、人それぞれ健康な方もいれば、又不幸にして病氣の方もいます。たとえ、どの様な健康状態でもそれはどうしようもない運命だと思います。ただその運命を少しでも良くするか、悪くするかはその人の考え方如何によるのではないのでしょうか。健常者でも、いつもぐちばかりこぼし不平不満をいつている人もいますし、一方障害者の方の中にも、自分でやれる事は、一生懸命になって少しでも役に立ちたいと頑張っておられる方もいます。心の病氣にならないよう努力しなければ駄目だと思います。

私は、人の氣持を大切に、心から優しくいたわり合えるような人間になりたいと、思っています。

五年間をふり返って

調理員 神野 ツヤ子

静かなせせらぎ、自然の環境に恵まれた美しいこの山合に「三惠ホーム」身体障害者、五十名収容可能な施設が開設されることになり、職

員の一人として採用され、給食業務を担当することになってから五年の歳月が過ぎようとしています。今までとは全く違った職場にとび込んで、どうなることかと不安でした。

真心しかないと自分に言い聞かせましたが現実はずいぶん、特に対人関係のむずかしさを痛感しました。

誠意を持って作った三度の食膳もはじめのうちは、家庭では味うことの出来ないお美味しい御馳走だと心から喜んだものでも日を追い月が立つにしたがって不足、不満が園生の間から出るようになり『も少し良いものを食べさせて』とか『こんなものは食べられない』と言う声が聞かれるようになり悲しい暗い気持ちになることもしばしばあります。

共通して言えることは馴れのこわさではないでしょうか。

山村に生れ育ち世事にうとい私でしたが、三惠ホームに勤務することになったおかげで各地の療護施設その他研修旅行、又園生との花見、運動会その他のレクレーションに引率する寮母さんに交って行くこともあります。

幼稚園の遠足でも並大抵の事ではありません。まして成人した大人で肢体不自由、時にはねたきりの園生を交えての乗物の乗降、指導員、寮母さん達は常に少しの氣のゆるみも許されない仕事なのです。

園内でのそれぞれの担当の仕事も併せて頭の下がる思いがします。この五年間をふり返って園生も職員も一つになって開設当時を今一度思いおこし、おかれたそれぞれの立場で感謝の氣持と深い思いやりの心を忘れず、今まで以上に明るく楽しい生活を出来るよう努力することが大切だと思います。



五周年に思う

調理員 菅崎 ヨシコ

五十五年四月身体障害者施設の職員となって早くも五年の歳月がたちました。

今まで自分の廻りには、身体の不自由な人達がいなかったため、初めて目の前にして、これは大変だなあと思いました。

でも、これからは、この人達の話し相手に少しでもなれるなら、又、家庭の味に少しでも近づく事ができるならと思ひ、栄養士さん初め調理員全員で、食事を作って居ります。

入所者にとって、食事は一日の生活の中でもっとも大きな楽しみの一つです。

また入所者の関心も非常に強いので、季節感を出すように心がけ、変化に富んだものにしたと思っています。

一人一人の嗜好が違い、年令差によっても好みが違う、偏食の多い方もいるし、食欲の差もあり、入所者の皆様に満足していただく事は大変な事だと思ひます。

色々な材料を切るにしても、魚の骨一つ取り除くにしても細心の心くばりをし、衛生面にも充分注意しながら、毎日の献立をスムーズに、かぎられた時間で調理、配膳をしなければなりません。その他行事食も多く、毎日の誕生会や、花見、野外食、バイキングとしてお寿司屋さんに来てもらい、注文をとり目の前でにぎってもらったり、盆踊り、運動会、地方祭、クリスマス会、その他色々、入所者と職員がいっしょに楽しく食事をして、少しでも身近に感じてもらえるように、入所者

の人達に喜んで食べていただけるように、調理員一同、これからも頑張つてゆきたいと思つて居ります。

食事後に、「あゝおいしかった」、と何気なく云つておられる言葉を聞いた時は、本当に嬉しく思ひます。この一言がどんなにか私達の力づけになりますし、目立たない職場ですが、ずっとこの仕事を続けたいと思つております。

調理員として

調理員 近藤 智美子

身体障害者施設で働く様になり早くも五年を迎えました。この間、厨房で調理員としての仕事をしてまいりました。調理員も外から見ますと、女性に適した仕事、そして家庭での炊事の延長くらいに思ひ、軽い気持ちで何のためらいもなく、就職いたしました。

仕事を続けていく上で、まず最初に感じた事は、施設の給食は、園生方の最大の楽しみであると思ひますからインスタントの味でなく、できるだけ家庭の味を出すようにしなくてはならないと思ひます。

自分の家庭で炊く三度の御飯はなにげなく炊いていますが、施設での御飯は家庭よりも米の量が多く、たびたび、水の量など教えてもらわなければ自信がありません。

一日に三度炊く御飯がそうですから副食などとても、一人でできるはずがありません。盛り付けにしても、仕切り皿一枚に盛り付けるよりも、一品一品を別の皿に盛り付けた方がよりいっそう美しく見え、食欲をそそのかすのではないかなど、毎日考えさせられます。

そして園生の方に毎日、喜んで、おいしく食べていただくためにも、家庭的な味付で、盛り付けにも気を配り、真心をこめた食事作りをいつも忘れないよう、私たち調理員は、努力しなければならぬと思います。

さらに栄養士が、四季の新鮮な魚、野菜、果物などを取り入れた、献立作成をしていただいているのですから、その材料、それぞれの持味、色、形などを生かした食事作りにつとめています。

特に病気などで特別食を作る時は、「早くよくなって下さいね。」との願いをこめて作りますし、普通食にもどった時は自分のことのように喜んでいきます。

これからも、私達調理員一同、日々勉強を重ね、頑張っていきたいと思っております。

健康と食生活

調理員 白石美枝

最近お米が見直されてきています。なんとといっても日本人にとつて、三食は米飯が理想とされているようです。私達の年令になると、パン食ではどうも、もの足りない気がする。いまでは、健康食ということ、で、玄米と小豆を炊いて常食にしている人も良く耳にします。豆類は、体に良いと言われ、大豆につづいて小豆は、たんぱく質、リン、鉄分も多く含まれ昔から重視された食品です。

それから野菜は、季節のものを、毎日五、六種類取ると良いといわれ、野菜類、緑黄野菜葉菜類など、まんべんなく食べることに。

油類は、中年以降は、動物性油脂よりも、植物性のものを取るようになると良い。

又、魚は、値段の安い、いわし、さば、さんまは、体に何よりの食品ときいています。

朝食をぬいたり、偏食をしたりしないこと、昔から腹八分に医者いらずと、言うように、どんなに良い食品でも、過食は良くないことです。中年になると、成人病が、気になるところですが、なるべく塩分、糖分をひかえ目にして調理すると良い。

近頃では、栄養補助食品ということで、ビタミン剤なども出廻っていますが、やはり、あやういものに頼らずに、毎日多くの食品を、バランス良く食べることを、日頃から心掛けたいものです。

私達のホームでの仕事は、献立にもとづいて、人それぞれに好みはあるけれども、おいしく食べやすく、調理して、入園者の人達に、喜んで食べてもらうことです。食事が終って、「おいしかったよ」、「全部食べたよ」と、返事が返ってきた時は、ほっとします。

考えて見れば、毎日同じことのくり返して、家に帰っても、昼の仕事の延長です。

平凡ではあるけれども健康な日々を、改めて感謝したいと思います。



園生の部

成長の涙

園生 荒井和美

私がこの三恵ホームへ来る前に入院していた愛媛病院にいる頃、ここに中川先生と云う私達身障者を担当する先生がいて、私達にいろいろな訓練や、相談相手になってくれていました。ある意味では私はこの先生に私の生き方を見つけてもらったような気がしています。私は座位もとれず、もちろん立ち上がる事も出来ません。常時はベット等に横になってゐるしかありません。こんな私に、中川先生はころがって移動する事を教えてくれました。初め私はビックリしました。それからしばらくはすねたり、泣いたり毎日が続きました。服に芝生のトゲがいつぱいくっついてチクチクし痛いのがまんして訓練は続きませんでした。こんな私の姿を見て、先生は涙を流してくれました。そんな時私はこの先生の胸の中へ思い切りとび込んで行こうと思いましたが私の全力を出し切ってどこまで出来るか頑張ってみようと思いましたが。愛媛病院での生活の中で私はいろいろな経験をさせてもらいました。私がこの三恵ホームへ行くこと決心したのはこの病院の生活が十年程続いた冬のことでした。先生はびっくりしたらしく「和美本当に行くのか。」と、心配そうに聞きました。ここは居心地がよすぎて自分自身の進歩がないという事を先生に話すところ先生は涙を流して送り出して

れました。しかし、三恵ホームでの生活は私が考えていた程甘くはありませんでした。何度中川先生のところへ帰ろうかと思つたかも知れませんが、ホームでの私の部屋は一〇一号室でした。私より年上の人達ばかりで、部屋での生活は以前に比べるとかなりきゅうくつなものでした。私はここへ来て初めて口喧嘩をして負けました。それからの私は一人ベットで泣く事が常でした。私はこんな部屋から出たいと思いましたが、この若い指導員の先生はいつでも部屋を変えてはくれませんでした。この頃の私は、中川先生の事を思う度にこの先生をにくくさ思いました。とてもこの人の胸にはとび込めそうもないと思つてました。そんな時、中川先生に電話をかけると、「もうお前はそちらの先生にまかせてある。」と云つてつき離されました。この日から私は本当の意味の一人歩きを始めました。あれから四年余りが経過しました。周囲の人達とけんかしたりはげまされたりしながら、私はこのホームの一員なんだなあと思えるようになりました。あの頃部屋をなかなかかえてもらえなかった事も今思うと私自身の為だったので。私は今、ここへ来て、少し成長したなあと思います。寮母さん指導員さん本当に有難うございました。よく私をこれ程までにしてくれたことを感謝しています。今後も私なりに一生懸命頑張りますので、よろしく願います。

生きる喜び

園生 飯尾小夜子

生れながらに障害を持った私は九人兄弟の末っ子だったので。そ

の当時は大勢の家族に囲まれて、幸せな日々を送っていましたが、父は、私が九才の時、母は三十六才の時、死別しました。母は生前の頃、私の将来の事を心配して、京都の大病院までも連れて行ったり、編物を習わせたりしてくれました。このような身体の私を施設にだけは、入れたくないとの思いを残しながら他界しました。その後は、兄夫婦のお世話になり、姉さんは、たいへん良く出来た人でしたが、お互いに必要以上に気を使う時もあり、このまゝ私が家に居たのでは、此の家ばかりではなく周囲の人にも迷惑をかける事になると思ひ、施設入園を、兄にお願いしました。色々話し合いの結果、ある施設へ兄が見学に行ってくれましたが、やはり兄も施設入園は強く反対しました。

其の話を義姉の妹さんに話すと、もう一年待てば川内町に身障者施設が出来ると聞かされ、一年間待ちました。

五十五年四月に入園させて頂き、その当時は寮母さんは九名で園生は八名でした。

新築の明るいお部屋、又、設備といい、何から何まで、私には素晴らしい第一歩でした。そして、寮母さんの献身的な介護に、天国へでも来たような最高の幸せでした。その様な毎日を過しながらも、ついづいづいがまゝを押えきれない時もあり、トラブルを起した時も度々ありましたが、信頼出来る友人に励まされ反省し冷静な気持になる事が出来ました。

又、職員の方々の、こまやかな、心配り、ある時は、親になり、又、ある時は姉妹となって優しい心で私達を包んで下さる寮母さん、此の様な幸せな現実の姿を、亡き母に一目でも見て頂き度いとしみじみと思ひます。生きる喜びをかみしめる今日、私は、少しでも人のお役に立ちたい、又、自分の趣味、手芸に精出し素直な気持で、明るいホーム作りに努力して行きたいと思ひます。

入所をかえりみて

園生 岡田 務

学校を卒業すると、すぐ大阪の会社に就職した。お酒も、タバコも好きで、よく飲んだ。塩辛い物が好きで、それをおかずにもよく飲んだ。会社にはいってからは、多勢の人と共に仕事をした。気がついた時には飲んだ後で、脳溢血で倒れた。会社専属の医者が、松山のある総合病院を、紹介してくれた。それで、故郷松山に帰った。今迄この様な施設があると云う事は知らなかったが、知人がホームを紹介してくれた。其の人が云うように無料で入園させてくれる所はないと思ひながら、入園して見ると、其の人の云った通りであった。今迄病院生活だけしか知らなかったが、入園してからは、職員のみなさんが、良く世話をしてくれるので、家に居るより、安心して、おれると思ひました。定期的に、お医者さんや、看護婦さんも、来て下さるので、何の心配もなく、家にくらべると、御殿の様なお所であると心から感謝している。ホームの俳句クラブにはいって、一生懸命頑張っている。今後も、情性に於かない様に、気をつけたい。



感謝の日々

園生 平田 みゆき

昭和五十五年、桜花ちらほら咲く頃、四月一日、温泉郡川内町の閑静な地に福祉法人、身障者療護施設三恵ホームが発足、私は今治より、次女の車にゆられ、二日午前九時入所させていたゞきました。小規模で直系の角野荘より寮母、看護婦達が来ておりました。今では園生も五十名と大世帯になりました。月間行事として、一日は清掃、四日に神事があり、第一月曜が散髪、二十五日が誕生会、昼食、御馳走、乾杯、記念品贈呈、午後アトラクション、手拍子うっておどって、とてもにぎやかな一日をすごします。家にいる時は誕生日など祝ってもらったことなどないのに……年中行事として、節分、節句にお花見、七夕様、夏は海水浴に行き西瓜割り、また食堂の裏庭の木陰でソーメン流しに舌つゞみをうちます。盆踊り、お月見があり、お祭り、家族をまねいて運動会やクリスマス、餅搗き、お正月を迎えることになりました。その他、看護婦による体重、血圧測定、医師来園診察、買物訓練、社会見学、オセロ大会、俳句会、お茶の御手前、手芸、映画観賞、焼物など、言えばきりがありません。夜勤の寮母さん二人による八時半からの、おむつ交換二十一時消燈、電灯もって巡廻、朝は五時から洗面介助、車椅子におろしてもらい食堂にでます。朝食七時四十分、ラジオ体操、機能訓練、寮母は各部屋を掃除、昼食介助、薬の投与、ベッドに上げてもらって休む。十三時半ラジオ体操、おむつ交換、また十六時半におむつ交換をして食堂へ夕食、寮母十七時半帰宅の途へ。身内の者にも出来ない、寮母さんの仕事は大変だと思ふ。ベル一つで

走り廻り、いたれりつくせりに頭がさがります。月、木曜は入浴日です。浴場までストレッチャーで行き、洗髪までしてくれ、金時さんの様になってベッドへ、さっぱり着替えをし洗濯まで一さいお世話になる始末、大勢の園生の世話をし、帰宅後も主婦の役目を果し、大変だと思ひます。御世話になるばかりで、感謝の念にたえません。何の御礼も出来ませんが、なるべく迷惑をかけない様に過ごしたいと思ひます。

喜びの心

園生 広瀬 律子

昭和五十六年十月一日に、現地三恵ホームに入園させて頂き、それ迄、急に不自由な身になり帰郷する迄大阪に住み、何かと不自由な日々を送り、泣く日の連続でした。

ありがたい今の幸福により、一人息子と生活する考へで帰郷しましたが、一人息子も昨年此の世を去り、自分一人身になり姉の所に世話になって居りましたが、姉も年老いて来て、何かと便利悪く、八幡浜市役所のご親切により、当ホームに入園させて頂き、こんな良い生活の場所があった事を日々喜び、園生の皆さんが兄姉、寮母さんが親の様、事務所の方々が相談して頂く方、何も不自由のない日々、障害者にも、こんな楽しい、暖かい場所があった事を、心より嬉しい日々を送らせて頂いて居ります。

春になれば、花見、夏になれば、盆踊り、秋になれば祭り、冬が来れば、クリスマスプレゼント、一から十迄つくして頂き、夜になれば

床に入っても夜中二回、三回と、寮母さんの見廻り、フトンをけつていないか、おなかを出してないかと気づかい、障害者になって居ても生きて居てよかった、と口に出さないが心中に止め、食事洗濯迄一つ一つ、気にして頂き親、兄弟でも仲々出来ない気づばりに、自分としては、何も出来ない身ですが、日々心で出来る事を念じつつ、明るい、明るい、ホームにしたいと念じて居る次第です。書きたい事は沢山ありますが、何しろ片手の者で、これで筆をおかせて頂きます。

昭和六十年一月十三日

我が生立の記

園生 平石 房子

私は東宇和郡城川町土居の生れです。生れた時は大きな女の子だったのですが、生後三日目に風邪を引き熱が出たそうです。非常に高熱で、その時小児麻疹になった。四才になっても、五才になっても歩く事が出来ませんでした。両親も心配して、福岡大病院まで行きましたが、何しろ五十年前の事で、何も分からなかったそうです。それでも学齢期頃歩ける様になり、小学校だけは行きました。

娘時代に大東亜戦争が始まりました。母が職員で、学校に行った後は、家の中の仕事は半分位はやりました。掃除、洗濯、子守り、今自衛隊に勤務している弟の子守りをしました。二十四、五才頃に、体が重くなったので歩けなくなりました。それから、家の中ばかりで、テレビ、新聞、雑誌が、友達でした。両親がだんだんと年を取って、世話が出来なくなったので、このホームへあずけられました。始めは、

とても不安でしたが、だんだんと慣れて、今では、友達が出来、楽しく毎日を送っています。俳句が好きで、めぐみ俳句会に参加し、楽しみにして頑張っています。

このホームの職員、又、寮母さんの方に、迷惑をかけて、申し訳なくおもっています。今後皆さんと共に元気で楽しいホーム作りをしたいと思えます。

三恵ホーム

創立五周年記念に寄せて

園生 松浦 ゆき子

私は市立宇和島病院で十六年間闘病生活後、S五十五年八月一日当ホームに参り、先ず驚いた事は、ホームに到着した途端、大勢の職員の方が玄関に出迎えて下さり感謝で一杯で、皆様園生も明るいのに心打たれました。今迄の温床の様な生活と異り、別世界に来た様で？外出が自由に出来ず外食を取る事もできないのは大変不自由を感じましたが、馴れるに従い、温い物は温いうちに頂く事ができ感謝で又入浴できる事は何んにも増して喜びであり感謝です。此の様に一刻も介助者なくては生きられない生れもつかない障害者になりましたのは、S三十九年秋脊髄の手術後、胸から下半身と頸椎が悪化し両手指先が麻痺し、用便の感覚が失われ日常生活が出来なくなり治療不可能が判明した時、当ホームに入園できました事は何より感謝でした。併し不幸なのは障害を背負っている事自体ではなく、障害者をとりにくく方達の

理解のなさがもっと不幸なのではないでしょうか、全く人生は明暗の交錯したもので、喜びを縦糸とし苦しみを横糸とした織物の様なものじゃないでしょうか、どんな不幸を吸いこんでも吐く息は感謝であり、一息一息が恵みの呼吸でありたいと思います。私はS十七年春中国で女学生の時発病以来一進一退を続け今迄の人生の大半以上を病苦と戦い、幾度も死を宣告され死線を彷徨し手術した事は大小十回余もあり、現在こうして生かされている事自体奇蹟と医師は申され、既往症も多く全く常人同様のオンボロの肉体を持ち乍ら、靈魂だけは健在でありたいものと昨日も今日も変り給う事なく愛をもって生きて働き給う尊き唯一の教主キリストを仰ぎ、望み、祈りつゝ、希望をもって一日一日を精一杯に生かされ、毎日退屈を知らない事は感謝です。私は余りに多く大きな病気を持ち、爆弾を抱へた様な体で死と壁一重の中に生かされていますが、今日あるはたゞ神様の大きいなる御憐みと恵みと皆様に職員の方達のお蔭と賛美と感謝に堪えません。

昭和六十年三月二十四日記

生きがい

園生 本山カズエ

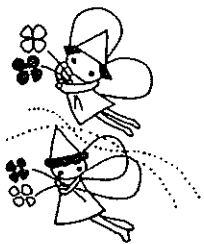
昭和五十四年十一月二十三日、一日の仕事を終え帰宅した私は近くの公民館の生花教室に出席して居ました。其の時突然少しの頭痛がして気を失い、それより十日たち、気がつくと、松山の犬野病院に入院して居りました。一年後の五十五年十一月に退院し自宅で、三恵ホームの入園許可を心待ちにして居ました。翌年十二月一日に入園させて

頂き、一番先に目についたのは食堂の「生きがいある楽しいホームをみんなで作ろう」と言う大きな文字でした。リハビリ室に案内して頂き、機能回復訓練室と書いてあり、私はこゝに生きがいを見出し出した様な気がしました。元の身体にはならなくても、こゝで訓練をさせて頂こうと心に決め、それ以来訓練室に行くのを毎日の楽しみにして居ます。

病院では一年余り入浴許可がされなかつたけれど、こゝではストレッチャーに乗せて頂き大勢の寮母さんに囲まれて、週に二回の入浴をさせて頂き感謝して居ます。障害を持つ私などとても外へ出る様な事はないとあきらめて居りましたが、社会見学で運動公園や飛行場に連れて行って頂き、身にしみる様な嬉しさを思う時、此のホームに入園して良かったとつくづく思います。

私の故郷は鹿児島県なのでつい早い早口になり相手に私の言葉が通じないので困る時も度々ありました。回診時など先生に私の言葉が理解して頂けず「もっとゆっくりと話す様に」と看護婦さんよりアドバイスを受け、今は大分落着いて話せるようになりました。今ではそれも笑い話になりました。

精神的にも落着いた毎日を送らせて頂き、五十九年一月には実家のお墓参りに二十五年ぶりに行きました。身障者の私にこんな幸せな生活の場があった事を心から感謝して居ます。ホームの職員の皆様、親や子供にまさる、お世話をして頂きありがとうございます。



人生至る処青山有り

園生 渡辺 菖子

「人生至る処青山有り」と云う漢詩の一節を、子供の頃より座右の言葉として居る。三恵ホームに入所するに当って、紆余曲折が有ったが、入所すると決心するともう迷は無いのが私の取柄でも有る。決心の動機は、手術後十年間も毎日会社勤めの時間を遣り繰って、三度の食事や清拭等に通って呉れた長姉がリウマチに罹り、タオルも絞る事が出来無く成っているのに、痛みを押してなお、私の為に看病して呉れているのを先生が見兼ねられて、病院に死ぬまで居る訳にもゆくまい、渡辺さんの為にもお姉さんの為にも良い事だと思ふけど考へ直して見て欲しいと云われて。私の退院をも考慮して、姉夫婦が借家住いでは何かと不自由だからと、前年に私も一緒に住める様に、家を建て、呉れたのに姉のリウマチは段々と悪く成るばかりで、私は退院に踏み切れぬ儘一年が過ぎた頃に、三恵ホーム入所の話が舞い込んで来たのだった。先生達が先ず見学して来られ、環境も良いし居室も明るくて、設備も万点だと聞かされても、妹を預って貰う所とも成れば確かめて来たいと、兄弟達も訪園し見学して来られました。五十五年十一月に入所させて頂いて、起座起立の出来無い体の私が、十五年振りにお風呂に入れて貰い、起死回生の心地で有った。次にベッドに車を取り付けて頂いて、ベッドの儘日光浴に出たり、園の行事等にも参加させて頂いたりして気分転換にも成り楽しみがふえた。電動車椅子の寄贈を受けて、私専用に貸して頂き日常生活に大革命をもたらした。街へ海へ山へと電動車椅子に寝た儘で社会見学にも参加出来る様に成った嬉し

さ楽しさの見返りに、衆人の好奇に満ちた眼差しが全身を刺すが、もとより覚悟の上の事、井の中の蛙の儘の生活よりも、遙に生の実感に浸れる一刻なのだ。「美しや障子の穴の天の川」一茶の句の様に、心の持ち方一つで逆境の身も楽しい人生を送る事ができる。真情溢れる園の対応に心から感謝してる。

